

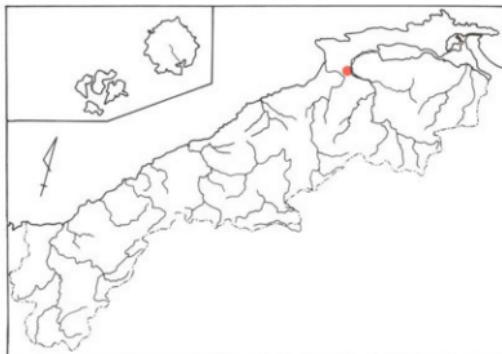
西谷墳墓群測量調査報告書



1998年3月

出雲市教育委員会

西谷墳墓群測量調査報告書



西谷墳墓群位置図

1998年3月

出雲市教育委員会

はじめに

出雲市大津町に所在する西谷墳墓群は、四隅突出型墳丘墓6基以上を含む歴史的な価値の高い重要な遺跡です。

出雲市教育委員会では、この重要な歴史的遺産の保護・活用を図るため平成9年度より周辺整備とともに指定史跡化を推し進めることとなりました。こうした活動の一環として、指定申請及び今後の保護活用に必要な遺跡の正確な図面等を作成するため、平成9年度に西谷墳墓群の詳細な分布調査を行なうとともに、測量調査を実施いたしました。

その結果、これまで多くの点で不明な部分が多かった小規模墳墓を含む遺跡全体の基礎的な資料をそろえることができました。

今回提示させていただきました資料が西谷墳墓群の解明に、また出雲平野の歴史解明に多少なりとも役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の調査にご協力賜りました土地所有者の方々、ご指導いただきました関係各位に厚くお礼申し上げて報告書刊行のごあいさつとさせていただきます。

平成10年3月

出雲市教育委員会

教育長 多 久 博



例　　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が平成9年度に実施した西谷墳墓群測量調査の報告書である。

2. 測量調査は、下記の期間において実施した。

平成9年（1997）10月30日～平成10年（1998）3月13日

草刈り・伐採 10月30日～12月10日

現地測量 12月8日～3月13日

3. 調査を行なった地番は、次の通りである。

島根県出雲市大津町3594-3ほか

4. 調査は、次の組織で行なった。

事務局 後藤 政司（出雲市教育委員会 文化振興課長）

調査員 藤永 照隆（文化振興課 主事）

調査補助員 石橋 弥生（文化振興課臨時職員）、鬼村奈津子（同臨時職員）

現場作業員 吾郷 妃子 奥田 広伸 片山 修 富田 勉

室内作業員 飯國 陽子 三成 留美

5. 挿図の方位は調査時に計測した磁北を示す。

6. 本書で使用した図面の内、第3図及び第6図については島根大学考古学研究室所蔵の西谷2号墓、西谷4号墓測量図面を一部参考、合成したものである。

7. 調査及び報告書刊行にあたっては、次の方々に御指導、御協力を賜った。

渡邊 貞幸（島根大学法文学部教授）、池田 満雄（出雲市文化財審議会委員）

8. 本報告書掲載の測量図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

本文目次

I. 位置と環境	1
(1) 位置	1
(2) 歴史的環境	2
II. これまでの調査	3
III. 調査の概要	5
1. 西谷1号墓	5
2. 西谷5号墓	5
3. 西谷6号墓	6
4. 西谷7号墓	6
5. 西谷10号墓	6
6. 西谷11号墓	6
7. 西谷21号墓	7
8. 西谷12号墓	7
9. 西谷22・23・24号墓	7
10. 西谷13号墓	7
11. 西谷14号墓	8
12. 西谷25・26号墓	8
13. その他	8
IV. 小結	20

挿 図 目 次

第1図 西谷墳墓群周辺主要遺跡分布図	1
第2図 西谷墳墓群分布図	4
第3図 西谷1号墓墳丘測量図	9
第4図 西谷6号墓墳丘測量図	10
第5図 西谷13・14号墓墳丘測量図	11
第6図 西谷5号墓墳丘測量図	12~13
第7図 西谷7号墓墳丘測量図	14~15
第8図 西谷10・11・21号墓墳丘測量図	16~17
第9図 西谷12・22・23・24号墓墳丘測量図	18~19
第10図 西谷丘陵周辺の旧地形	22

巻末写真図版目次

図版1-1 西谷墳墓群空中写真	図版3-2 西谷10号墓
図版1-2 西谷1号墓	図版3-3 西谷11号墓
図版2-1 西谷5号墓	図版4-1 西谷12号墓
図版2-2 番外3号墓	図版4-2 西谷13号墓
図版2-3 西谷6号墓	図版4-3 西谷14号墓
図版3-1 四谷7号墓	

I. 位置と環境

(1) 位置

西谷墳墓群は、出雲市大津町の西谷と呼ばれる小さな谷を形づくる丘陵上及びそこから派生する丘陵上に位置し、これまでの調査によって、四隅突出型埴丘墓6基以上を含む、弥生時代後期後半から古墳時代にかけての、墳丘を有するもの16基以上と墳丘を有さないもの3基以上の合計19基以上の墳墓からなる大規模な墳墓群であることがわかっている。

現在の出雲平野をとりまく地形は、北に北山山麓、南に中国山地から派生した丘陵地が連なり、東には宍道湖、西には日本海がある。この宍道湖と日本海には、それぞれ斐伊川、神戸川が注いでおり、出雲平野は、この二大河川によって形成された沖積平野となっている。



第1図 西谷墳墓群周辺主要遺跡分布図

- 1.西谷墳墓群
- 2.白枝荒神遺跡
- 3.小山遺跡
- 4.矢野遺跡
- 5.大塚古墳
- 6.石臼古墳
- 7.山持川川岸遺跡
- 8.糞ヶ堀城跡
- 9.平林寺山古墳群
- 10.勝利山古墳群
- 11.大寺古墳
- 12.萩村古墳
- 13.斐伊川鉄橋遺跡
- 14.天神遺跡
- 15.大念寺古墳
- 16.塚山古墳
- 17.平家丸城跡
- 18.角田遺跡
- 19.神門寺境内庵寺
- 20.上塙治築山古墳
- 21.築山古墳
- 22.上塙治横穴墓群
- 23.大井谷城跡
- 24.半分城跡
- 25.三田谷I遺跡
- 26.小坂古墳
- 27.刈山古墳
- 28.半分古墳
- 29.地藏山古墳
- 30.栗栖城跡
- 31.放れ山古墳
- 32.大槻古墳
- 33.吉志本郷遺跡
- 34.田畠遺跡
- 35.妙蓮寺山古墳
- 36.淨土寺山城跡
- 37.地藏堂横穴墓
- 38.宝塚古墳
- 39.福知寺横穴墓群
- 40.小瀬山横穴墓群
- 41.知井宮多聞院遺跡
- 42.山地古墳
- 43.上浜貝塚
- 44.正蓮寺周辺遺跡
- 45.出雲大社境内遺跡
- 46.原山遺跡
- 47.斐根遺跡

しかしながら、遺跡が造営された頃の景観は、現在とはかなり異なっていたようである。現在東流して宍道湖に注いでいる斐伊川が、当時は西流して、入海のような状況を呈していた潟湖（現在の神西湖・奈良時代の「神門水海」）に注いでいたようである。また、宍道湖の西端も現在よりかなり西にあったものと考えられている。このような地形のもと、西谷墳墓群は斐伊川が出雲平野に流れ入る地点の左岸にある、南から北へ伸びる丘陵上に営まれた遺跡である。

(2) 歴史的環境

出雲平野には、数多くの遺跡が存在している。出雲平野における遺跡の初源は、平野の北にある縄文時代早期初頭の菱根遺跡（大社町）、西の砂丘下にある縄文時代早期末の上長浜貝塚に遡るが、これに続く遺跡は確認されていない。

縄文時代後期・晩期になると、平野の北には出雲大社境内遺跡（大社町）や原山遺跡（大社町）が営まれるほか、南の丘陵下にある三田谷遺跡でも多量の上器が出土し、生活の場となっていたことが近年の発掘調査によって明らかになっている。また、平野の中央部の矢野遺跡からも少量の遺物が発見されている。しかしながら、縄文時代における生活の場の中心は平野の縁辺部にあったものと考えられる。

弥生時代には、矢野遺跡などで前期の遺物が確認されているが規模は小さい。しかし、中期中葉以降、入海周辺の沖積地に集落が飛躍的に拡大し、天神遺跡、古志本郷遺跡、正蓮寺周辺遺跡、田畠遺跡、小山遺跡などの大規模集落が出現する。その中には矢野遺跡、知井宮多聞院遺跡など、貝塚を伴う例もあり、地域的な特色となっている。なお、こうした大規模集落は古墳時代前期初頭にまで継続して営まれる。また、弥生時代後期以降、四隅突出型墳丘墓6基以上を含む西谷墳墓群が南の丘陵上に築造される。この中には、3号墓など突出部を入れると一辺約50mもあるような大型のものもあり、この時期にはある程度共同体的な結合が図られ、その首長の権力が強大になってきたことが窺える。

古墳時代になると、前・中期の遺跡や古墳は少ないが、後期後半には今市大念寺古墳、上塩治塗山古墳、地蔵山古墳など横穴式石室を有する大規模な古墳が築造される。また、南の丘陵には上塩治横穴墓群、神門横穴墓群など大規模な横穴墓群が築かれ、東部出雲の安来平野、意宇平野に並ぶ勢力が存在していたことが窺える。しかしながら、これらの古墳、横穴墓の被葬者を支える基盤となった大規模集落は明らかではない。

奈良～平安時代にも遺跡は点在しており、中でも墨書き器などの文字資料を出土する天神遺跡、小山遺跡、三田谷I遺跡などが注目される。また、この時期になると神門寺境内庵寺、長者原庵寺などの私寺が建造されるとともに、小坂古墳の石檻や朝山古墳、脇沢古墳などの初期火葬墓があり、いち早く仏教文化が取り入れられていたことが窺える。奈良時代に編纂された『出雲国風土記』には、当時西流していた出雲大川（現在の斐伊川）下流域の様子について、「或いは土地豊かに沃えて上穀・桑・稔り款枝に、百姓膏腴の國なり。」と記載されており、当時の出雲平野は農業に適した肥沃地であったようである。

II. これまでの調査

西谷墳墓群の発見は1953年まで遡り、4号墓開墾中に多量に土器が発見されたことによる。しかしながら、この時点では墳墓としての把握はされていない。1958年にはこの時発見された土器を発見者の池田満雄氏が「下米原西谷丘陵出土土器」として、出土地を「下米原西谷丘陵遺跡」として報告された。

その後10年以上この遺跡に対する研究・報告等は特になされなかつたが、1970年に地崩れ面に露呈していた土壙墓（番外1号墓）とそれに伴う土器が発見され、翌1971年に島根県立商業高等学校移転に伴う島根県教育委員会による事前分布調査によって、1号墓・4号墓・5号墓が確認されたことにより、にわかに西谷丘陵への関心が高まった。

1972年には自然崩壊の恐れがあった1号墓を出雲市教育研究会が緊急発掘調査し、これが四隅突出型墳丘墓であることが確認された。また、同調査時には番外1号墓・番外2号墓も含めて調査が行われている。同年、前述の4号墓出土土器の中に特殊壺形土器・特殊器台形土器が含まれることが報告されたことも当遺跡への関心を更に高める要因となった。

以来、島根県教育委員会の分布調査や出雲考古学研究会の精力的な活動によって1980年までには四隅突出型墳丘墓6基を含む墳丘を有するもの14基、墳丘を有さないもの3基、計17基の墳墓が確認され、出雲考古学研究会は主な墳墓の墳丘測量などの成果を含めた報告を『西谷墳墓群』として刊行された。

1983年から1992年にかけては、島根大学を中心とした調査団によって西谷3号墓の2期に渡る発掘調査が行なわれ、貼石・配石構造、主体部の棺・櫛構造、第1主体・第4主体の合計約300個体にも及ぶ供獻土器、第4主体の上部施設として壮大な墓上施設を確認されるなど、多くの貴重な成果をあげられた。

また、1991年から1992年にかけては、簸川南地区広域営農団地農道整備事業に伴って、農道ルート上に15、16号墓が新たに発見され、これについて出雲市教育委員会が発掘調査を実施した。これにより15号墓は古墳時代中期の方墳で、16号墓はほぼ同時期の円墳であることが明らかになった。その後15、16号墓は農道工事のため破壊された。

以上のような調査によって、西谷墳墓群が四隅突出型墳丘墓6基以上を含む、墳丘を有するもの16基以上、墳丘を有さないもの3基以上、計19基以上の墳墓からなる、少なくとも弥生時代後半と古墳時代中期頃には造営されていた墳墓群であることが確認されている。これまで墳墓として認定されているもの以外にもいくつかの墳墓と思われるマウンドが存在することもすでに指摘されており、実際の数はさらに増えるものと考えられる。今回の調査においても墳墓と思われるマウンドをいくつか確認できた。

今回これらのマウンドについて、基本的には発見された順で新たに墳墓番号（17～26号墓）を付すこととした。



第2図 西谷墳墓群分布図

参考文献

- ・池田満雄「下米原西谷丘陵出土土器」『出雲市文化財調査報告』第1集 出雲市教育委員会 1956年
- ・近藤 正・前島己基「島根県松江市の場塚墳墓」『考古学雑誌』第57巻第4号 日本考古学会 1972年
- ・門脇俊彦「また出た発生期の古墳」『季刊文化財』17号 島根県文化財愛護協会 1972年
- ・門脇俊彦「西谷墳墓群」『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会 1980年
- ・出雲考古学研究会『古代の出雲を考える2—西谷墳墓群—』 1980年
- ・渡辺貞幸他「西谷墳墓群の調査(1)」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』 島根大学法文学部考古学研究室 1992年
- ・渡辺貞幸「弥生墳丘墓における墓上の祭儀—西谷3号墓の調査から—」『島根考古学会誌』第10集 島根考古学会 1993年

III. 調査の概要

1. 西谷1号墓（第3図）^{註①②}

西谷1号墓は西谷西側丘陵の現状での北西先端部付近、標高約43mに位置し、南東方向には2・3号墓が隣接して存在している。

当墳墓は1972年すでに全面発掘調査がなされており、その報告によると、北東—南西約8m以上、南東—北西約5m以上の墳丘部を持つ四隅突出型墳丘墓であるという。

1号墓北西側は1972年の調査当時にはすでに山道によって大きく削られており、規模の推定が困難である。山道の対面側においても墳丘の痕跡等見られず、ボーリング調査によっても列石等の痕跡は確認できなかった。

丘陵南西側斜面もやや崩れているようであるが、その上で本来の丘陵尾根部の広さなどを考慮しても原形も墳丘部一辺15mを超えない程度の小規模なものであろうと推測される。西谷墳墓群の中で四隅突出型墳丘墓と確認されるものの中でも最も小規模なものである。

また、1号墓の北西方向には土壙墓である番外1号墓、箱式石棺である番外2号墓が当時の調査により確認されているが、今回併せて行なった分布調査ではそれらを確認することはできなかった。

2. 西谷5号墓（第6図）^{註③④}

西谷5号墓は1号墓と同じ丘陵の南東約200m、標高約47mの尾根上に位置し、北側には4号墓が隣接して築造されている。

南南東—北北西方向に主軸をとる前方後方形墓と推定される墳墓で、北北西側が前方部と推定される部位、南南東側が後方部と推定される部位である。

前方部・後方部共にかなり地形が乱されており、現状では不正形なものとなっているため、正確な規模等は把握できないが、標高47m付近で等高線の広がりが確認され、およその墳端は同標高付近であろうと推測される。あるいは前方後円墳等の別の墳形であるかもしれない。

現状から推測される規模は、全長約38m、後方部長約22m、幅約20m、高さ約2.5m、前方部長約16m、幅約10m、高さ約0.75mとなる。頂部平坦面については規模の把握が困難である。

1980年の出雲考古学研究会による報告によれば、前方部に土壙1基が確認されていたようであるが、今回の現地調査においてはそれを確認することはできなかった。

遺物については不明であるが、地元の方からの情報によると、昔は5号墓周辺で須恵器の土器片が頻繁に見つかっていたとのことである。1992年の渡邊貞幸氏による報告にある、4号墓測量調査中表採須恵器片も5号墓に伴うものであるかもしれない。

また、後方部南東の墳裾付近には箱式石棺墓である番外3号墓が現在も露出した状態で存在している。

3. 西谷6号墓（第4図）^{註④}

西谷6号墓は5号墓の南東約100m、標高約50mの丘陵尾根上、西谷の最も奥まった場所に位置する。現状で方形状を呈する墳墓である。

墳丘の南側・西側は大きく崩壊しており、北側・東側部分の一部のみが残存する。残存部分も北東隅などでかなり地形が乱されているようである。現状での長辺に対してほぼ東西方向に主軸をとり、残存規模は東西12m、南北8m、高さ1.75m、頂部平坦面東西6m、南北4mである。1980年の出雲考古学研究会による測量調査時には墳丘西側裾の痕跡が残っており、東西17mと報告されている。

また、墳丘の斜面や周囲、東側墳裾付近の断面露出部分には人頭大～拳大の自然石が散在しており、貼石等が施されていたものと推定される。ボーリング所見では北側・東側共に石列が残存しているようであり、北東側隅では張り出すように石が確認される状況にあることから、四隅突出型墳丘墓である可能性が高い。

4. 西谷7号墓（第7図）^{註⑤}

西谷7号墓は西谷の東側丘陵最高部、標高約49mに造られ、斐伊川を見下ろす場所に位置する。

この墳墓は従来より全長約32mの前方後方形墳墓とされていたが、今回の測量調査では当墳墓を前方後方形墳墓とする積極的な根拠は見いだせず、前方部と後方部と推定されている部分の間、つまりくびれ部に当たる箇所は、山道が走っている為に等高線が一部前方後方墳状に流れているのではないかとも考えられた。

墳丘は西北西～東南東方向に長軸をもっており、方形墳墓だとすれば、長辺約22.5m、短辺約16mで、北北東部分で高さ約2mの規模を計る。他方向の高さは1m程度であり、北北東の方向を意識した造りである。頂部平坦面はやや崩れているが、長辺約14.5m程度、短辺約8.5m程度と推定される。前方後方形墳墓であるとするならば、前方部幅約13m、前方部長約10m程度、前方部高約1m、全長約32.5mということになろうか。また、墳丘北北東側にはやや広い平坦面が広がっている。

5. 西谷10号墓（第8図）^{註⑥}

西谷10号墓は、7号墓から北に向かって伸びる丘陵の尾根上標高約40mに築かれた墳墓である。

この墳墓は北北東～南南西方向に主軸をとる方形墓で、規模は現状で南南東～北北西約10m、東南東～西南西約9m、高さは最も高い地点で約1.25m、頂部平坦面南南東～北北西約6.5m東南東～西南西約4.5mを測る。また、丘陵の北側を切断して築いた痕跡が認められる。

墳丘北側墳裾付近は現在山道によって大きく削られているが、削平の影響を受けていない部分の地形から推測すると、墳丘部分の破壊は小規模なものであろうと考えられる。

6. 西谷11号墓（第8図）^{註⑦}

西谷11号墓は10号墓北方の山道を挟んだ北側、標高約39m尾根上に位置しする従来方形墓とされたいた墳墓である。

墳丘は原形がやや損なわれているが、現状では径約19mの円墳状を呈し、高さ約2.5mを測る。頂部平坦面は特に地形が乱されており判然としないが、円形墳墓であるならば径8m程度の平坦面を有するものと推定される。

7. 西谷21号墓（第8図）

11号墓のさらに下方、つまり北北西側約10mの位置には北北東—西南西方向に長軸をとる方形状の小マウンドが1基今回新たに確認された。これを21号墓とする。規模は現状で長辺約10m、短辺約8m、頂部平坦面長辺約5m、短辺約3m、高さは東北東側で約1m、他辺で約0.5m程度である。

11号墓裾から21号墓裾までは平坦面が続いている、双方が築かれる平坦面の高さはほぼ同じ標高となっている。

8. 西谷12号墓（第9図）^{註⑤}

西谷12号墓は7号墓の南側丘陵、西谷丘陵の中で最高所となる地点の南東端標高約53mに位置する。現在は7号墓の築かれている丘陵と12号墓の築かれている丘陵は道路によって分断されているが、本来双方の丘陵はつながっていたものである。

墳丘は北西—南東方向に主軸をとる方形墓と推測される。墳丘南東側は原形を損なっているようであり、南西側も墳裾が判然としないが、規模は現状で一辺約10m程度、高さ約1.25m、頂部平坦面一辺約6mを測る。

9. 西谷22・23・24号墓（第9図）

12号墓のある丘陵頂部にはその他に墳墓と思われる3基のマウンドが新たに確認された。それぞれのマウンドは、丘陵頂部を中心にそれぞれ西・北・南側に配置されるような形となる。西側のマウンドを22号墓、北側のマウンドを23号墓、南側のマウンドを24号墓とする。

22号墓は、西北西—東南東方向に主軸をとる方形形状を呈するもので、規模は現状で長辺13m、短辺10m、高さ約1.5m、頂部平坦面長辺6m以上、短辺5m以上を測る。

23号墓は、円形もしくは方形形状を呈し、規模は現状で9m程度、高さ0.75mを測る。かなり原形を損なっており、頂部平坦面の規模は把握できなかった。

24号墓は、北東—南西方向に主軸をとる方形形状を呈するもので、規模は現状で一辺12.5m、高さは南西側で1.5m、頂部平坦面一辺約6.5m程度を測る。

10. 西谷13号墓（第5図）^{註⑥}

西谷13号墓は、12号墓から東へ伸びる丘陵が斐伊川側へ最も迫り出した付近で、丘陵頂部からやや北西へ下った斜面中腹の一部丘陵が迫り出した部分、標高約43mに位置する。

13号墓は現状では北北西—南南東方向を主軸とする方墳状を呈する墳墓である。北、西側墳裾は原形をやや損なっているが、規模は現状で一辺約10m、高さは北北西側で約1.5m、頂部平坦面一辺5~4.5mを測り、南南東側では丘陵を切断した痕跡が認められる。また、この墳墓は丘陵の尾根上ではなく斜面中腹に築かれているという点で他の墳墓と様相を異にする。

11. 西谷14号墓（第5図）^{註①}

14号墓は13号墓の南南東約15m、丘陵頂部標高約50mに位置する墳墓である。

墳丘南側は原形を留めておらず、北側も残りが良好ではないため正確な形状の把握は困難であるが、標高49.75m付近でやや平坦な部分が確認され、このレベル以上の北側等高線の流れから推測すると、本来は径約12m、高さ約1.5m程度の円形墳墓かと考えられる。

12. 西谷25・26号墓

今回併行して行った分布調査によって、新たな墳墓と思われるマウンドをこれまで述べてきたもののに他に2基確認できた。位置は10・11号墓の立地する丘陵に平行して北側へ伸びる東側・西側丘陵尾根上に各1基づつが確認された。

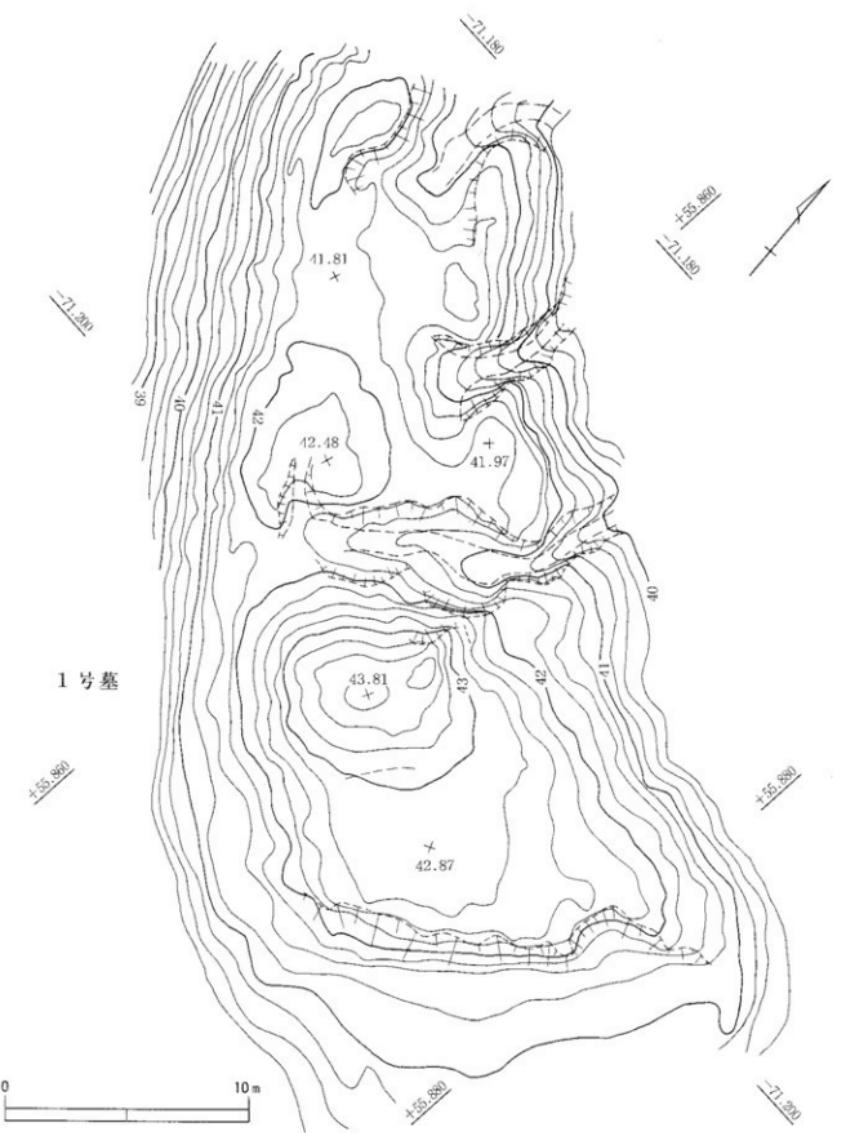
西側丘陵のマウンドは、頂部の7号墓から約80m北西、標高約41mの位置に立地し、現状で円形状を呈するものである。これを25号墓とする。全体に地形がかなり乱れており、どれほど原形を留めているか判然としないが、南側で円形状に丘陵を切断した痕跡が確認される。規模は現状での略測で径25m、高さ2.5mである。頂部平坦面については把握が困難であるが、径10mはあったのではないかと推定された。

東側丘陵のマウンドは丘陵尾根先端部付近、標高約24mに立地し、現状で西北西—東南東方向に長軸をとる方形形状を呈するものである。これを26号墓とする。西北西側・東南東側各辺は裾が不明瞭であるが、北北東側には明瞭な平坦面があり、南南西側には丘陵を切断した痕跡が確認される。規模は現状での略測で長辺17m、短辺13m、頂部平坦面長辺12m、短辺8m、高さは西北西側で2.5mを測る。ただし、南南東側では現状の高さ0.5mとなり、裾の高さにかなり差がある。

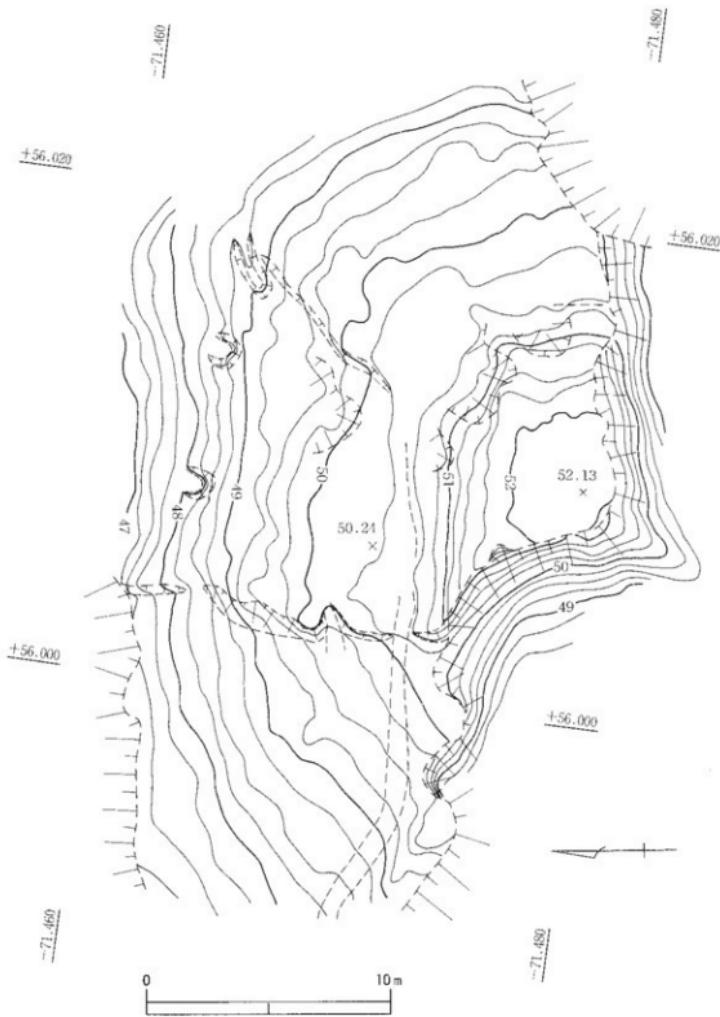
13. その他 ^{註②}

ここまで述べてきた1・5～7・10～14・21～26号墓の他、すでに詳細な測量図面にあるものや消滅しているものについては今回改めて報告はしなかった。

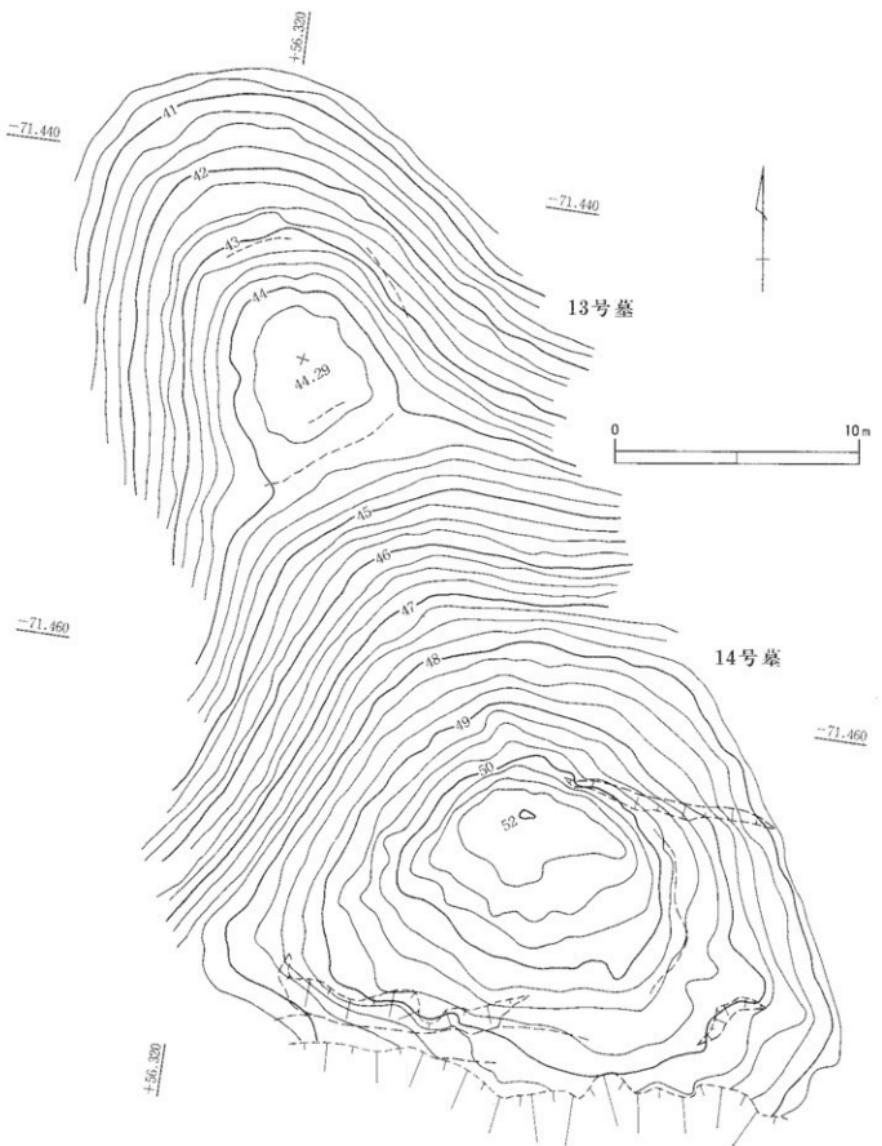
ただし、1992年の渡邊貞幸氏による報告において、3号墓の南方に1基、9号墓の西方に3基の墳墓と思われるマウンドが存在することがすでに確認されているが、これらのマウンドについて、それぞれ3号墓南方マウンドを17号墓、9号墓西方マウンドを北から18号墓・19号墓・20号墓と新たに番号を付すこととした。



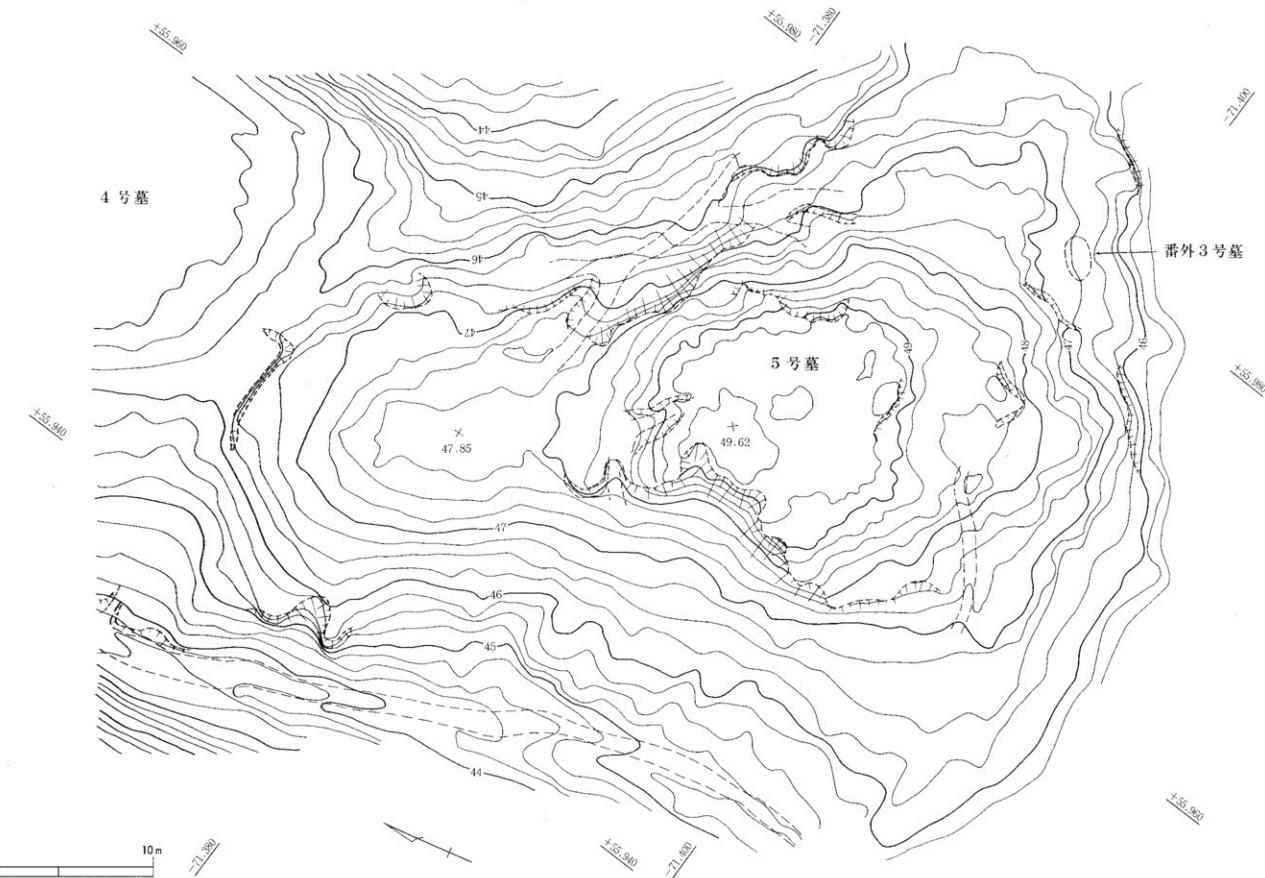
第3図 西谷1号墓墳丘測量図



第4図 西谷6号墓墳丘測量図



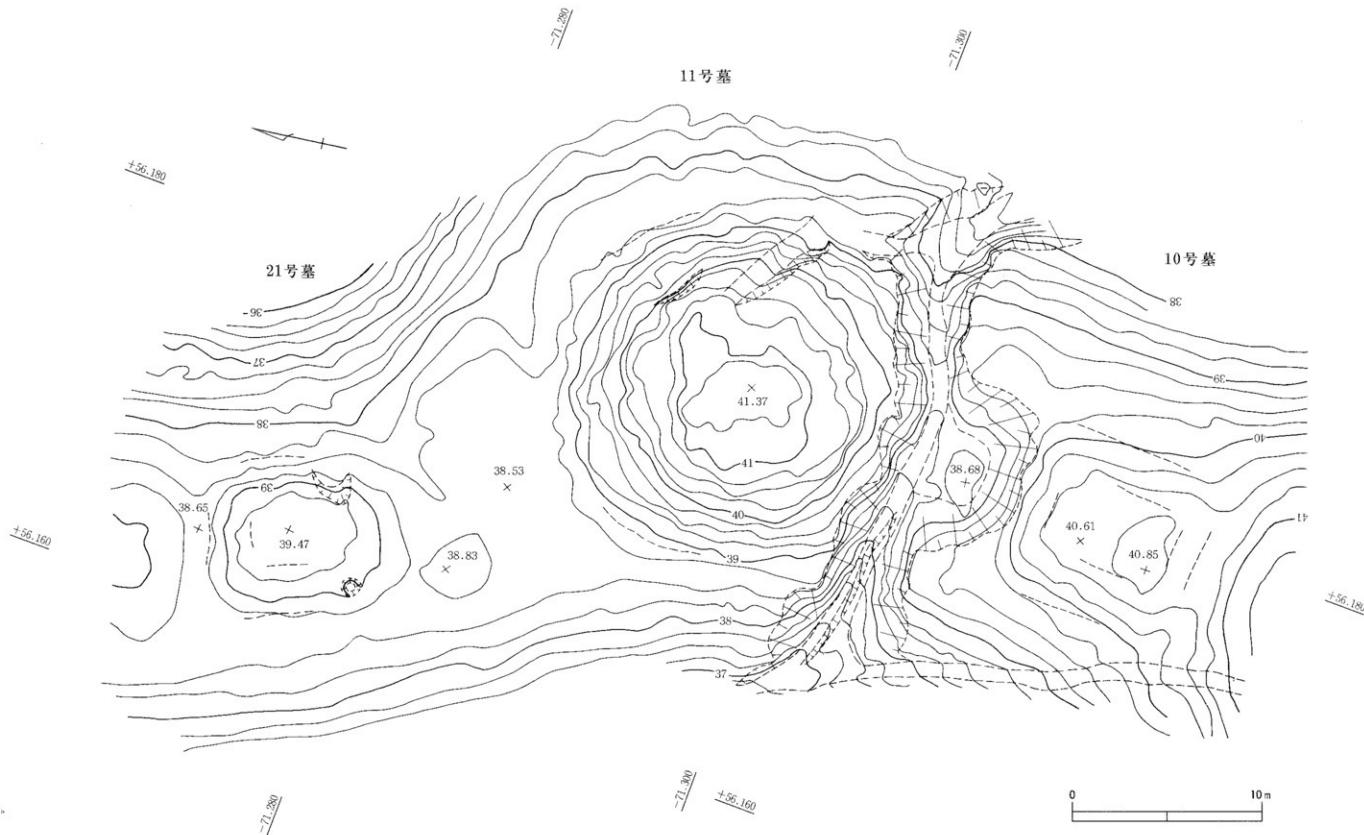
第5図 西谷13・14号墓墳丘測量図



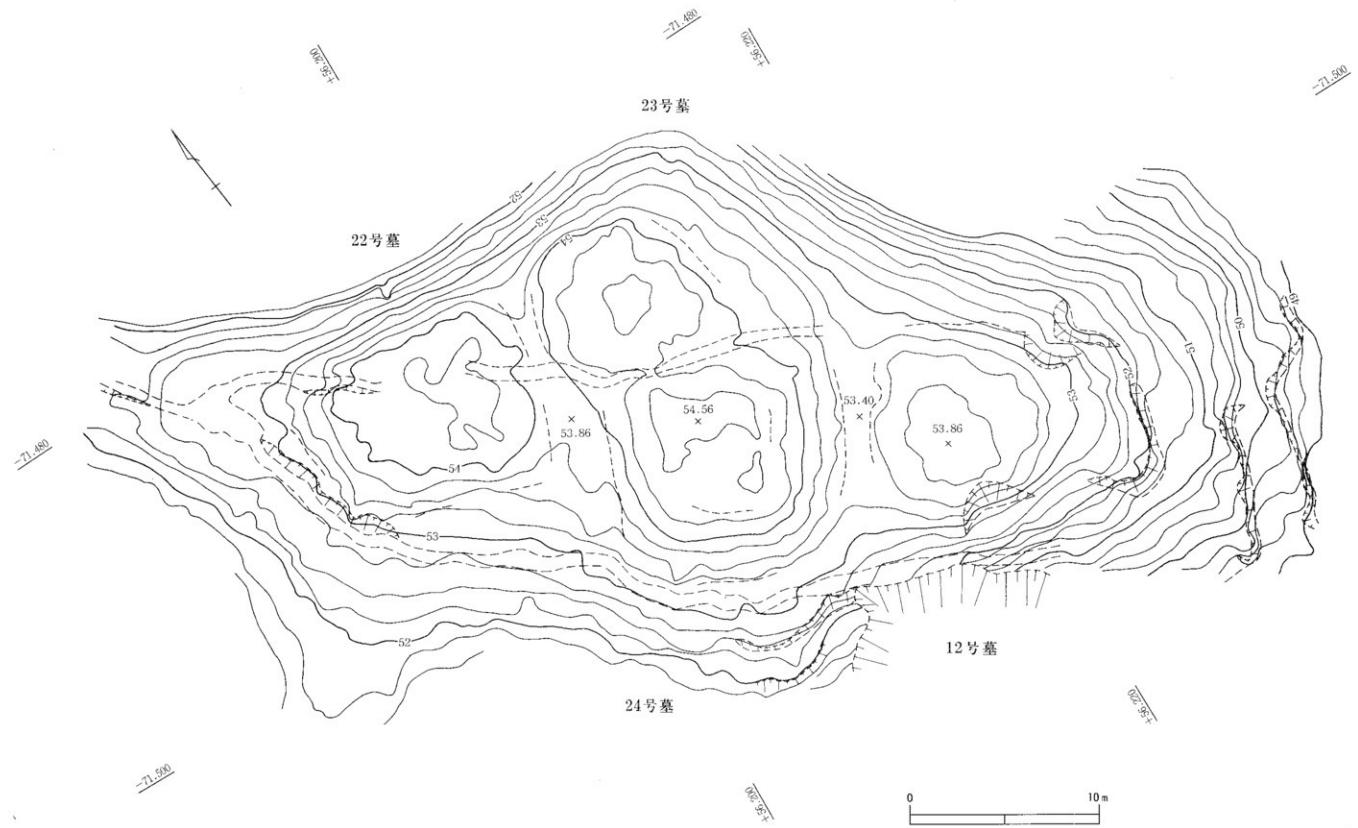
第6圖 西谷5号墓填丘測量圖



第7図 西谷7号墓填丘測量図



第8図 西谷10・11・21号墓墳丘測量図



第9図 西谷12・22・23・24号墓墳丘測量図

IV. 小 結

今回の調査によって、西谷墳墓群を構成する墳墓の墳形・規模等に関する基礎的資料を得ることができた。

従来から墳墓として認識されていたもの（1～16号墓・番外1～3号墓）は合計19基ある。墳形等について見ると、1・2・3・4・6・9号墓の6基が四隅突出型墳丘墓と確認され（6号墓は推定）、8号墓がその可能性あるものとして指摘される。その他の墳丘を有する墳墓には、5・7・10～16号墓の9基が確認されている。墳丘を持たないものについては、番外1～3号墓の3基が確認されている。その他の墳丘を有する墳墓（5・7・10～16号墓）の大部分は小規模な円形もしくは方形墳墓であると推測されるが、5・7号墓のようにやや大型の前方後方形を呈するものも存在する。ただし5・7号墓共に前方後方形と断定できるものではない。

また、今回の調査及び従来の調査の中で、新たな墳墓と認識されたマウンド（17～26号墓）が、合計10基確認されている。これらのマウンドも外形からは円形もしくは方形の形状を呈すものである。これらの新たな墳墓の中には四隅突出型墳丘墓の可能性が指摘できるものは確認できなかった。全体の分布状況としては西側丘陵には四隅突出型墳丘墓が多く分布し、東側丘陵には円形もしくは方形の墳墓が多く分布するようである。

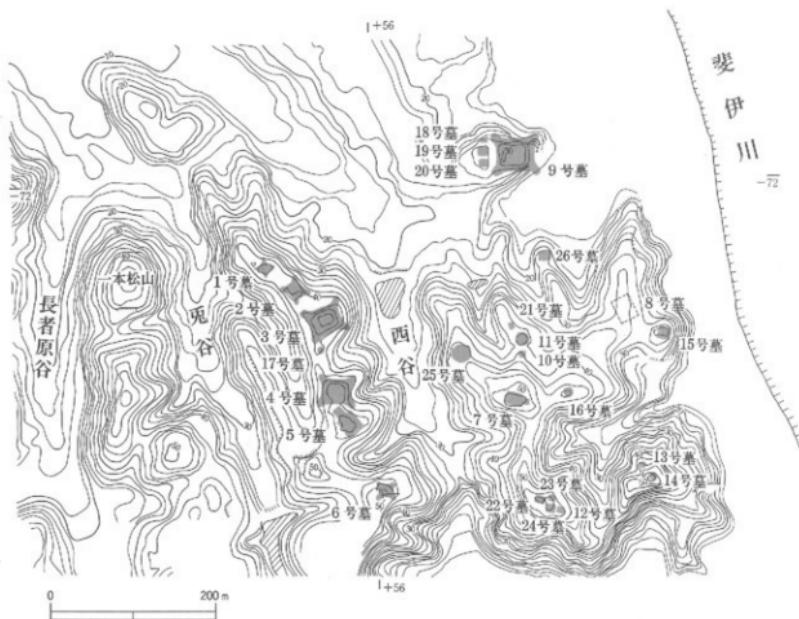
それら全てを合計すると、総計29基にものぼる大墳墓群ということになる。この数はあくまで現在確認される数であり、これまでに破壊されたもの、土中に埋もれているものなどがあるであろうことを考えると、その実体はさらに多くの墳墓が存在するであろうと推測される。今となっては確認する術もないが、地元の方の証言によれば、現在の鳥根県立出雲商業高等学校敷地造成時に削平された西谷丘陵西側の丘陵地、当時一本松山と呼ばれた箇所にも大形の墳墓らしき高まりがあったということである。削平時には大量の土器片らしきものがあったとの話もある。

また、今までに時期的な把握がある程度なされている墳墓は、1・2・3・4・6・9・15・16号墓、番外1号墓である。1・2・3・4・6・9号墓及び番外1号墓ではいずれも弥生時代後期のものと考えられる遺物が確認されており、15・16号墓ではいずれも5世紀後半～6世紀初頭のものと考えられる遺物が確認されている。その他、本書で報告したとおり5号墓も須恵器の生産された時期に製造されたものである可能性がある。少なくとも西谷丘陵には弥生時代後期と古墳時代中期頃に墳墓が築造されていたのである。しかしながら、その築造が継続的なものであったのかどうか、その後にも墳墓は築造されたのかどうか、現在の資料からは知りえない。残念ながら今回の調査中においても、このようなことが解明できるような良好な表採資料を得ることはできなかった。今後の課題したい。

西谷墳墓群一覧

名 称	墳 形	墳丘規模(一边×一边×高) 単位:m	主 体 部	遺 物	備考・註記
1号墓	四隅突出	8以上×5以上×1.7	土壙4	弥生土器	半壙③④⑤
2号墓	四隅突出	15×?×2	土壙2以上	弥生土器	半壙④⑤
3号墓	四隅突出	40×30×4.5	土壙8以上	弥生土器 鉄劍 玉類	①⑤⑥⑦
4号墓	四隅突出	34×27×4		弥生土器	①②④⑤⑥
5号墓	前方後方形?	全38前16×10×0.75 後22×20×2.5	土壙1以上	須恵器?	①⑤
6号墓	四隅突出	17?×8以上×1.75	土壙4以上	弥生土器	半壙④⑤
7号墓	前方後方形?	全32.5前10×13×1後22.5×16×2		土器細片	①⑤
8号墓	四隅突出?	31?×31?×2以上		土器細片	消滅④⑤
9号墓	四隅突出	42×35×4.5		弥生土器	④⑤⑥
10号墓	方形	10×9×1.25			④⑤
11号墓	円形	径19×2.5			④⑤
12号墓	方形	10×10×1.25			④⑤
13号墓	方形	10×10×1.5			④⑤
14号墓	円形?	径12?×1.5			④⑤
15号墓	方形	15×15×0.9	土壙1	須恵器 土師器 刀子	消滅
16号墓	円形	径11×0.5~1	箱式石棺1	鉄劍 鉄斧 鉄製鬚先	消滅
17号墓	円形?	高1			從來無番⑥
18号墓	方形	7×7×0.5			從來無番⑥
19号墓	方形	14×12×1			從來無番⑥
20号墓	方形	13×10×1			從來無番⑥
21号墓	方形	10×8×1			新発見
22号墓	方形	13×10×1.5			新発見
23号墓	方形?	9×(9)×0.75			新発見
24号墓	方形	12.5×12.5×1.5			新発見
25号墓	円形?	径25×2.5			新発見
26号墓	方形	17×13×2.5			新発見
番外 1号墓	無		土壙1	弥生土器	③④⑤
番外 2号墓	無		箱式石棺1		③④⑤
番外 3号墓	無		箱式石棺1		④⑤

* 1 四隅突出型墳丘墓の規模は突出部を含まない数値



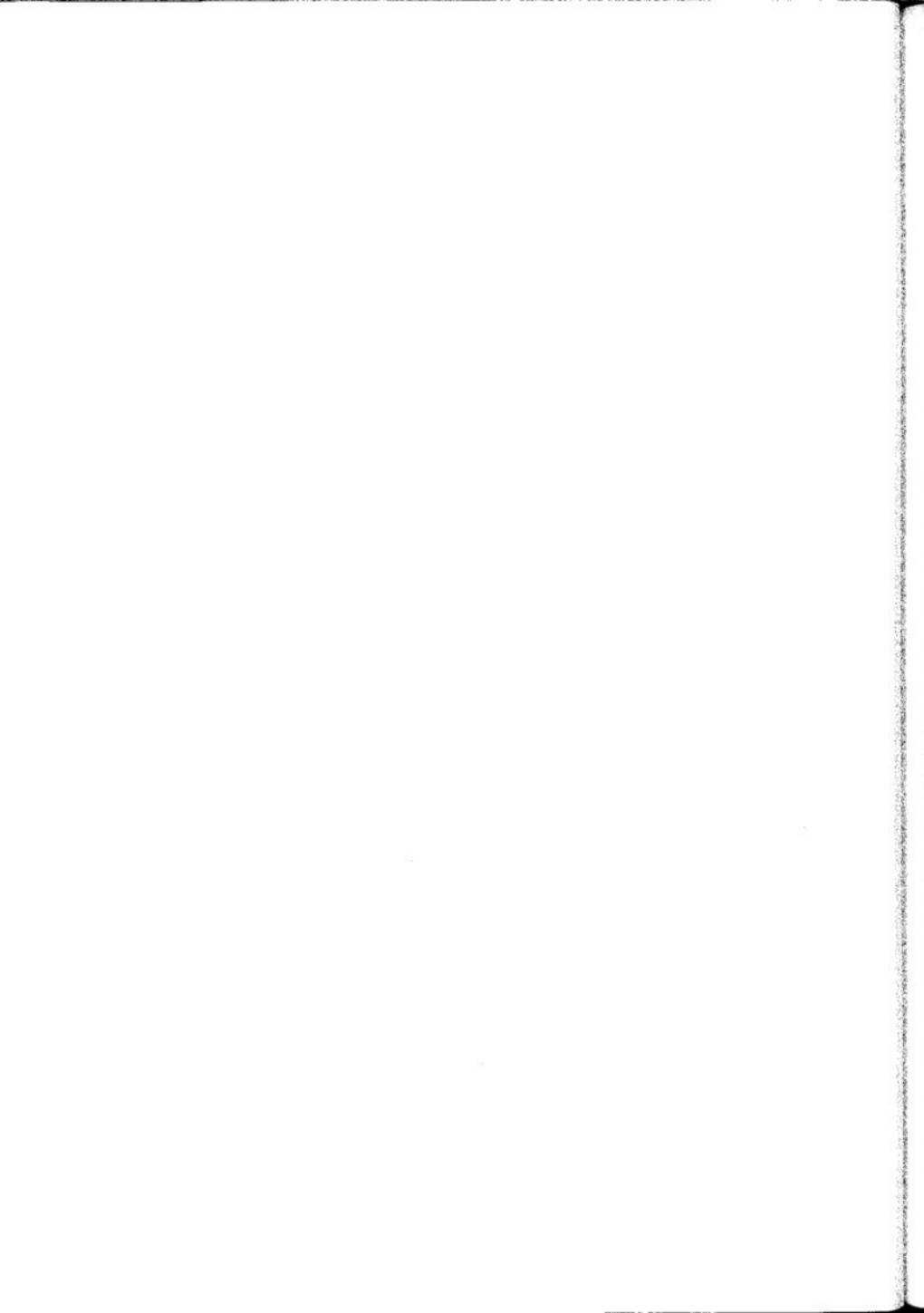
第10図 西谷丘陵周辺の旧地形 註⑧

註釈

- ①池田満雄「下来原西谷丘陵出土土器」『出雲市文化財調査報告』第1集 出雲市教育委員会 1956年
- ②近藤 正・前島己基「島根県松江市の場塚墓」『考古学雑誌』第57巻第4号 日本考古学会 1972年
- ③門脇俊彦「また出た発生期の古墳」『季刊文化財』17号 島根県文化財愛護協会 1972年
- ④門脇俊彦「西谷填墓群」『出雲・上鹽治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会 1980年
- ⑤出雲考古学研究会『古代の出雲を考える2—西谷填墓群—』 1980年
- ⑥渡辺貞幸「西谷填墓群の調査(1)」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』 島根大学法文学部考古学研究室 1992年
- ⑦渡辺貞幸「弥生墳丘墓における墓上の祭儀—西谷3号墓の調査から—」『島根考古会誌』第10集 島根考古学会 1993年
- ⑧⑨中の第3図(昭和48年測図1/2500出雲都市計画図と県立商業高校敷地造成工事に関する一括書類中1/3000地形図及び3号・4号・9号墓測量図を国土座標に合わせて合成したもの)を基に一部丘陵地形の範囲を広げ、今回測量の各墳墓面と島根大学考古学研究室より提供を受けた2号墓の図面を合成したものである。



图 版





1. 西谷填墓群空中写真（北より）



2. 西谷 1号墓（南東より）

図版 2



1. 西谷 5 号墓（4 号墓頂部より）



2. 番外 3 号墓（下方が西谷 5 号墓側）



3. 西谷 6 号墓（北より）



1. 西谷7号墓（北東より）



2. 西谷10号墓（北より）



3. 西谷11号墓（北より）

図版 4



1. 西谷12号墓（北西より）



2. 西谷13号墓（北西より）



3. 西谷14号墓（南東より）

西谷墳墓群測量調査報告書

平成10年（1998）3月

編集・発行 出雲市教育委員会
出雲市今市町北木町3丁目1-6

印刷・製本 (有)ナガサコ印刷
出雲市下横町350